

【やや黄色い熱をおびた旅人】

1

黄色い紙の事情

2001年6月

東京

原田宗典

その紙はやけに黄色い——

そう思うのは、私はその紙の正体を知っているからだろうか。先入観とやらが、紙の色を実際以上に黄色く見せているのだろうか。いずれにしてもかなり黄色いその紙は、もう随分と長いこと私の革の手提げ鞆の中に入れてある。三年、いや、そろそろ四年にもなるうか。旧パスポートよりも一回り小さいくらいのサイズで、嵩張るわけでもないので、名刺や通帳やダイレクトメールなどのおおむね薄っぺらいものと一緒にして、鞆の内ポケットの中に何となく入れたままにしてある。まあ、護符みたいなものだろうか。だから私はしばしばその存在を忘れてしまうのだが、それが思いがけない時にふと甦ってくる。初対面の人に名刺を渡

そうとする時や、銀行の窓口嬢を前にしてあたふたと通帳を探す時などに、その独特の黄色が目端にちらつくのだ。その度ごとに私は、

「ああ、あるな……」

と心の中で呟く。別に提示する必要に迫られることなどないのだが、持っていてよかった……ような気がするのだ。役には立たないと分かっているながら、棄てる気などには到底なれない。何しろその黄色い紙の表には、日英仏の三カ国語でこう記されているのだ。

〈黄熱の予防接種に関する国際証明書〉

三ツ折の中を開くと、そこには私の姓名や生年月日、性別などが黒々とタイプされていて、その下に私自身の手による間の抜けた署名がしてある。

〈この証明書は、上記に署名した者が、ここに記入した年月日に黄熱の予防接種又はその再接種を受けたことを証明するものである〉

一九九七年七月十九日——。

タイプされた年月日に続いて、予防接種実施者の署名および職業上の資格、ワクチンの製造所や製造番号などが添えてある。

〈この証明書は、使用したワクチンが世界保健機関によって承認されたものであり、かつその予防接種実施施設が、その所在領域の保健主管庁によって指定されたものである場合に限り有効である。この証明書の効力は、予防接種が行われた後十日から十箇年の期間又はこの十箇年の期間内に再接種が行われた場合にはその再接種の日から十箇年の期間となる。この証明書は、医師が自筆で署名しなければならない。その者の

印が公認のものであっても署名に代えられない。この証明書は、改訂し、若しくはまつ消したとき、又は不完全なときは、無効とすることがある。

この簡潔だが口うるさい口上は、日英仏の三カ国語で記されている。そうなのだ——私が何年もの間、鞆に入れて持ち歩いていた黄色い紙というのは、私が黄熱病の予防接種を受けた者であることを証明する、国際証明書なのだ。そうと知っているからこそ、私の目にはその紙の色がやけに黄色く映ったものか……ともあれ私は目の端にちらつく黄色を意識すると同時に、ぼんやりと思いつく——一九九七年の夏のことを。中でも予防接種を受けた日のことは、よく覚えている。

場所は、丸の内のオフィスビルの中にある診療室だ。エアコンの冷氣

に混じって、かすかに漂う消毒液の匂い。受付ですれ違った黒人青年の酒糟じみた体臭を思い出す。二メートル近い長身の彼は、どちらかの脚が悪いのか、自分にしか聞こえない音楽に合わせて身体を左右に揺さぶるかのような歩き方で、エレベーターホールへ消えていった。その後姿は、何かの予兆のように思えた。

受付を済ませてからは、それほど待たされることもなかった。小さな郵便局のそれを想わせる待合所に入ると、私は壁際のソファに腰を下ろした。しかし落ちつく暇もなく、すぐに私の名前が呼ばれる。

「三番の診察室へお願いします……」

受付の無表情なお嬢さんにそう言われて、私はやや緊張した面持ちで立ち上がった。三番というのは、すぐ真正面にある扉だった。

「ふう……」

と一旦肩で息をしてから、私は扉の方へ歩み寄った。厄介な仕事を一つ済ませる——という気持が、私の中にはあった。

扉を開くと、中は中学校の保健室くらいのスペースで、そこにこれもまた保健室の先生風の女医がいた。書きものの手を止めて振り向き、私のことを見つめてくる。なかなかの美貌だったので、目が合った私はどぎまぎした。

「座っていいですか……」

相手の答えも待たずに、私は目の前のスツールに腰を下ろした。突っ立っているのが何だか恥ずかしかったのである。

女医は私に対して、過去の病歴やアレルギーの有無を手短に質問した。

そして机の上のアクリルケースの中から、ワクチンのアンプルと注射器を取り出した——それは思っていたよりもずっと小粒で、束の間、私をほっとさせた。

しかしながら実際に二の腕にゴムバンドを巻かれ、身体の中にワクチンを注入されてみると、その痛みというのは今までに経験したことのないものだった。思わずウツと声を上げそうになるのを堪えて、余所へ目を逸らすとその先には、女医の冷めた視線があった。

「はアい……気持が悪くなってきたら、言ってお下さいね」

言い慣れているのだろう、その口ぶりはまるで歌うようだった。

そう言われてみると不思議なもので、何だか気持が悪くなってきたようにも思える。こわごわ女医の手先を見ると、彼女の華奢な指先はやけ

にゆっくりと、搾るように注射器のポンプを押し込んでいた。その緩慢な動きに合わせて、シリンダー内の黄熱ウイルスが、少しずつ少しずつ私の体内に送り込まれている。黄色いウイルスが肉体の中に溶けていく様子を想像して、私は正直ぞっとした。瞬間、身体をこわばらせてしまったほどだ。

一九九七年の夏——それは私にとって、一言で形容するならば、何だか柄にもない夏——であった。

何しろこの夏の私は、柄にもなくテレビの仕事をしようとしていた。NHKのドキュメンタリー班が、終戦記念日の特別番組として、現代の若者たちの「戦争と平和」を取材したいとの話で、そのレポーター役を是非に、と請われたのである。番組の若いディレクターが言うには、今

現在この日本から飛び出して、世界各地で「戦争と平和」に関わる活動をしている若者たちを取材したい、「戦争を知らない子供たち」すら知らない子供たちにとっての戦争観・平和観を描きたい——ようするに硬派なドキュメンタリーに仕上げたいというのだ。

終戦記念日に「戦争と平和」を真っ向から問う。そんな大仰な番組のレポーター、つまり案内役をつとめるなんて、私にとってはどう考えても、何だか柄にもない。仕事であった。実際に海外取材の日程が固まり、取材先や対談の相手が絞り込まれて、番組が徐々に現実味をおびてきて、今ひとつ私には実感がわかなかつた。

「ジュネーヴでは国連難民高等弁務官に話を聞く。予定時間二十分」

「アフリカのエリトリアでは、憲法制定の経緯などを法務大臣にイン

タビューする予定」

「ユーゴスラビアではベオグラード郊外に、ボスニア・ヘルツェゴビナの戦火を逃れたセルビア人の難民施設を訪問」

日を追うごとに次々と知らされてくる取材予定は、いずれも私にとっては、何だか柄にもない。予定ばかりで、他人事を聞かされているようにしか思えなかった。

そんな調子で、何とも現実味のわかない旅行前の慌ただしさの中にあつて、唯一黄熱病の予防接種の痛みだけが、強烈に現実的だったのだ。

予定では、アフリカからジュネーヴ、ユーゴスラビア、タイ、カンボジアなどを巡る、二十日間の取材旅行になるはずであった。おそらく最初のアフリカか、カンボジアのどこかで、黄熱病発生の恐れがある区域

を旅することになるのだろうか——それにしても黄熱病とは。私はすぐさま野口英世の顔を思い出した。しかしそれ以外には何ひとつ思い浮かばないことに、やや愕然としてしまった。いずれにしてもこの私が、黄熱病で死にかねないような地のはてまで、旅することになろうとは。

四年前の夏にあんな旅をしたなんて、自分でも信じられないくらいなのだが、例のやけに黄色い紙が、それを証明してくれているのだ——だから鞆を開けた際にその紙の黄色が目端をかすめると、

「ああ、ちゃんとあるな」

そう思うと同時に、私はちよつとした誇りのようなものを感じてしまう。もちろん未だにそうなのだ。だからあの旅から四年が経とうとする今となっても、私はやけに黄色い紙を持ち歩いたりしているのだ。もし

かしたら私の中に、旅はまだ終わっていない、という意識があるのかもしれない。

何しろ黄熱病の予防接種の効力ときたら、十年間、つまり二〇〇七年の七月まで続くというのだ。それは換言するなら、私の体内に注入されたワクチンとしての黄熱ウイルスが、そのまま十年間生き続ける——というシュールな現実を物語ることになるのでは？

私は自分自身の体内のどこかしらで深い眠りにについている黄熱ウイルス、というものをイメージしてみる。接種した直後のあの厭な痛みと、気持の悪さが一瞬甦る——それは異生物に侵入されんとする肉体の、嘆き、だったのかもしれない。肉体が内側から嘆くと、あんなに辛いものだとは、私は知らなかった——。